

「おじいちゃん、戦争のことを教えて」孫娘からの質問状

中條高德著 小学館文庫

著者の紹介

昭和2年、長野県生まれ。陸軍士官学校、旧制松本高校を経て、昭和27年学習院大学卒業。アサヒビール入社。63年副社長に就任。平成2年アサヒビール飲料会長。平成10年よりアサヒビール名誉顧問。著書に「立志の経営」等がある。

孫娘の景子は、父親の転勤でN・Yへ行く事になった。景子が入学したのは、マスター・スクールという、男女共学の国際色豊かな学校で、12年制でありながら全校生徒は300人程度という小さな学校である。生徒の半数は寮生活をしていて先生も何人かはその寮に住んでいるという。

景子が12年生になった時、彼女から手紙が来た。アメリカ史の先生Miss.Woodから、第一次大戦から第二次大戦の頃の家族や知人で、戦争を体験した人の話を聞こうと言う事になった。この時、私の頭に浮かんだのはおじいちゃんだった。戦争中は軍人の学校に行っていて、戦後はビール会社でお仕事をしていたからです。「おじいちゃん、お願い。景子の質問に答えて下さい」

アメリカはかつて敵国だった国の人間の戦争体験を聞き、それを教材にして歴史認識を深めようという態度に、アメリカの自信と強い底力を見た気がした。日本は、近現代史をちゃんと教えて来なかった、私達も系統だって子供に語り継ぐことをして来なかったという反省がある。私は景子の質問に答えようと思った。

質問1：おじいちゃんが生まれた1927年（昭和2年）の日本の様子はどんなふうでしたか？

私は、長野県更埴市の地主の家に生まれた。女4人、男2人の6人兄弟の末っ子に生まれた。私が生まれる少し前の1923年、日本は関東大震災に見舞われた。そして1927年、台湾銀行、鈴木商店が破綻し、恐慌が全国に拡大した。1929年ブラックマンデーがやって来た。その一方で満州事変が勃発する。その背景には、ソ連が帝政ロシア時代以来一貫して南下政策をとり続けていた。不凍港を求めて南に進出しようとしていたのである。ソ連は、蒙古、満州、さらに朝鮮半島に進出をうかがっていた。そこで日本は、李王朝が統治していた朝鮮に働きかけた。しかし李王朝は、中國を支配していた清朝に従属的な姿勢をとり続け、独立した近代国家に脱皮しようとしなかった。これで日清戦争がはじまった。日本はこれに勝利し、遼東半島が日本に割譲された。 (1)

所が、仏、独、露が干渉し、日本はこれを仕方がなく受け入れた。所謂三国干渉である。清朝の勢力が衰退して行く中で、朝鮮半島に空白が生まれた。其処へロシアが台頭してきた。そして日本はロシアとぶつかった。これが日露戦争である。それに勝利した日本は朝鮮を併合し、満州国を独立させることになった。しかし、満州事変で採った行動が世界各国の非難を浴びた。遂に日本は国際連盟を脱退して国際社会から孤立して戦争への道を行く事になる。満鉄を共同経営しようと言うアメリカの鉄道王ハリマンの提案を受け入れていたら、歴史は変わっていたかもしれない。つまり、日本の国家活動の基本はソ連に対する脅威に対するものであったと言う事である。

質問2：おじいちゃんが受けた義務教育はどんなものでしたか？

戦前は尋常高等小学校があり、尋常科6年が義務教育、その上に高等科が2年～3年となっていた。この上に、中等教育、普通中学と工業、商業学校に分かれていた。これ等を合わせても、50%以下の進学率であった。中等教育は5年、卒業すると旧制の高等学校、又は私立の予科か本科に進む事になる。旧制高等学校は、エリートコースで、その定員は帝国大学の定員とほぼ同じだった。この他、師範学校のコースもあった。軍人養成の為に、中学一年から進学できる陸軍幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学と続いた。海軍も同じだった。おじいちゃんは中学4年を修了して陸軍士官学校へ進んだ。戦前の教育の特徴は、「個」と「公」の二つを調和させて生きるのが、現実であり大切なことだと教えられた。今の教育は「個」に重点が置かれ過ぎているように思える。

質問3：おじいちゃんは何故軍人の学校へ行ったのですか？

当時のアジア情勢は、清国がアヘン戦争に負け、他のアジア諸国はタイを除いて列強の植民地になっていた。其処へ黒船が日本へ来た。そして明治維新が始まり「富国強兵」、工業化推進のため「殖産興業」をスローガンにした。アメリカもカメハメハ王朝を1898年に併合し、王国は跡形もなく消されてしまった。おじいちゃんが子供の時は、勉強が出来て健康な子供は、陸士か海兵へ行くのが当然という雰囲気だった。学費は一切無料であった。その為、公的使命感は大きかった。私の両親も、男の子が二人いるから末っ子の一人は国に尽くす人間になってもらいたいと思っていたのだろう。

質問4：陸軍士官学校の教育はどんなふうでしたか？

全生徒が寄宿舎に住み、午前は学科、午後は訓練という毎日であった。又、厳格な規律が行き渡った教育であった。一言で言えばストイックの極致のような教育であった。

(2)

人間というのは使命感を抱き、その使命に誇りを持っていればどんな過酷な事も平気になれるものだ。国家という「公」に尽くす使命感を教えられたのである。

質問 5：おじいちゃんは戦場に行ったのですか？1945年8月15日の終戦の時どうしていたのですか？

おじいちゃんは戦場に行かなかった。陸士に在籍して居て卒業する前に戦争が終わってしまった。無条件降伏の敗戦はどうしても信じられなかった。同期生の内3人が発狂した。私もその一歩手前まで行っていた。頭が真っ白になって何も考えられなかったし、何も考えたくなかった。

質問 6：それからおじいちゃんは新しい道をどんなふうに見つけたのですか？

世間の元軍人を見る目は厳しかった。私の居場所は無かった。故郷の信州に帰省し、実家の仏間に引きこもり、外出しなかった。一人の戦争未亡人が身の回りの世話をしてくれていたが、その人のお蔭で新しい人生を始めることが出来た。

質問 7：戦後の学生生活の様子、その中でおじいちゃんは何を考えていましたか？

1946年旧制松本高校に合格した。しかし入学は禁じられた。GHQの指示で、軍関係の学校に一年以上学んだ学生は、全生徒の一割以内に抑えるという命令があったのである。当時の校長は、来年は必ず入学させると約束をしてくれた。私は一年待って入学した。作家の北杜夫や辻邦生も当時松本高校に在学していた。おじいちゃんは今でいう学生自治会の委員長を務めていた。その時友人から安部能成先生の勉強会に誘われた。先生は戦前、一高の校長、戦後は文部大臣になり、学習院大学の初代学長を務めた教育者であった。私は、当時知識に見識に飢えていた。人間の一生にとって、師と仰ぎ心から尊敬できる人にめぐり会うことはとても大切なことだ。安部先生から新制学習院大学入学を勧められた。私は決めた。両親は反対した。国立大学に進み国家公務員になる事をイメージしていたからである。しかし、両親のすすめるままに陸士に入った事を反省し、今回は自分で結論を出すことに決めたのである。

質問 8：おじいちゃん、ビール会社に就職しましたが、何故ビール会社を選んだのですか？

私は、戦前の経験から、「官」（権力構造）からより遠い所で生きたいと思っていた。最初は、新聞記者を希望したが、母が猛反対した。 (3)

田舎では、新聞記者はゴロツキ、品性下劣なものというイメージがあったからである。それで、これから経済成長していくために民間会社に入る事にした。又、食糧事情が悪い状態であったので、まず何より食糧関係と思ったのである。同時に受けた千代田銀行、今の東京三菱銀行にも合格したが辞退した。

質問 9 : 1941 年 12 月 8 日、日本とアメリカは戦争に突入しました。この戦争をおじいちゃんはどう考えますか？日本にとって正しい戦争だと思いますか？

まず、白人国家である欧米列強の帝国主義、中でもソ連の南下政策の脅威が常に意識されていた。朝鮮併合も満州国独立も、この文脈の中で理解されなければならぬ。又、アメリカも太平洋を隔てた彼方に、日本が近代国家として台頭してくるのが目障りだったのだろう。日本に対して、始終批判的で冷やかであった。ハワイを併合した事や日本からの移民を排除したり圧迫したりという事をアメリカはしばしばやっている。一方、ソ連の進出を抑えにかかる日本の行動は、イギリスにとっては、好都合であったため、日英同盟が結ばれたのである。1924 年、排日移民法が作られ、陸海軍統合委員会を作り、日本を仮想敵国とする「オレンジ計画」が作られた。

国家とか国益を言う前に、人類愛、ヒューマンイズムの方が重要だという議論があるが、それは理想的というより空想的である。国家が守られて始めてヒューマンイズムは、その機能を発揮する事が出来る。

1937 年大陸の盧溝橋で、日本軍と中国の国民党の軍隊が衝突し、戦争に発展した。シナ事変である。当時、中国では蒋介石率いる国民党軍と毛沢東率いる共産党が対立し、内戦状態にあった。最近の研究では、追い詰められた共産党軍が国民党軍を装って日本軍に発砲したという説が有力になっている。日本軍と国民党軍と戦わせる事で、国民党軍の力を削ぐのが狙いだったというわけである。日本政府は不拡大方針をとっていたが、軍部が突出して拡大方針を推進したのである。これが日本の岐路だったと私は思う。日本は決定的な過ちを犯してしまった。そして、広い中国大陸において、抜け出そうとしても抜け出せない泥沼の戦いに入ってしまったのである。この事が、アメリカに明確な日本敵視政策をとらせる事になった。米、英、中、蘭、4ヶ国が ABCD ラインを構築し、日本に経済制裁を加えたのである。しかし、この包囲網は、アメリカが最初から日本を戦争に追い込むつもりだったと思わざるを得ないようなやり方であった。日本はアメリカに交渉を申し入れたが、アメリカは話し合いの場に出て来なかった。日本は、中国大陸からの撤兵さえ考慮していたのである。これは記録が残っている。そして、突然「ハル・ノート」を通告してきた。日本は中国大陸から軍隊を全て引き上げる。仏印からの撤兵等が要求であった。(4)

この要求を日本が飲めば、ABCD ラインを解くというのではなく、ABCD ラインをどうするかの話し合いに応じるというのであった。こうして日本は、遂にアメリカに対して戦火を開くことになったのである。アメリカの意図がどうであれ、日本を戦争以外には選択の余地がない所に追い込んだのは、アメリカの最大の過ちであった。この戦争の責任は日本とアメリカの両方にある。日本は大陸に戦線を拡大して誤った。アメリカは日本を戦争以外の選択肢がない所に追い込んで誤った。これは双方がキチンと認識しなければならない事である。

質問 10：終戦後の日本は、とてもひどい状態だったと聞いています。どんな様子だったのですか？

それは、凄惨な状態だった。東京、大阪、名古屋などの大都市は無差別空爆を受け壊滅状態に陥った。これはジュネーブ協定違反であることは間違いがない。強調したいのは、戦争の終わりがすぐそこに見える時点で、何故、原爆を投下しなければならなかったのか、とおじいちゃんはアメリカに問いたい。アメリカでは原爆による犠牲者を、投下された瞬間の数だけで数えている。その後、毎年増えて行く犠牲者の数は加えていない。国際法上違反する武器を使用した負い目から犠牲者の数を少なくしよとしているのである。アメリカが言う「原爆を使用した事によって戦争が早く終結した」というのであれば、犠牲者が多い方が論理的に正しいではないか。

質問 11：終戦後、日本の戦争犯罪を裁く、極東軍事裁判が開かれました。おじいちゃんは、この極東裁判をどう考えますか？

東京裁判は 21 世紀最大の汚点だと思っている。戦争に勝ったというだけで、勝者が敗者を思いのままに断罪した。それがこの裁判である。近代法の精神に根本的に反している。東京裁判は、アメリカをはじめとする連合軍側が、自分達が戦争したのは正当な行為であるアピールする為に仕組んだショーである。裁判には裁く為の法律が必要である。東京裁判の根拠になった法律「平和に対する罪」は事後法なのである。事後法は近代法の精神が厳しく戒める所のものである。事後法とは、それまでなかった法律を作り、その法を遡って適用する事を言う。日本も他国に侵攻し、多くの人々に苦しみを与え、間違ったことでしたが、日本が欧米諸国の白人国家と戦ったことが、アジアの多くの人々が、植民地支配の苦しみから解放されたのも事実である。

質問 12：終戦によって日本はリホームされ、新しい体制になった。おじいちゃんはこのリホームをどのように考えますか？

このリホームは、日本人が自ら考えてリホームしたのではない。 (5)

GHQ がリホームを行ったのだ。これは主権が無かった 7 年間だけでなく、今も尾を引いている。今でも、日本では日本の近現代史を教えていないのはこの影響である。大学入試でもこの時代の出題はされない。評価かが定まっていないと言うが、事実は事実ではないか。事実は評価によって動くものではない。それは言い訳に過ぎない。又、昭和 22 年に制定された憲法は主権を持たない独立して居ない国が制定したものである。つまり、アメリカの意思で作られたものであり、可笑しなことに、独立後も、そのまま受け継がれている。これほど奇妙なことは無い。憲法を考えると言う事は、日本を考えると言う事である。日本の歴史、文化、伝統を改めて見直し、それを踏まえて、これからの日本はどうあるべきか、未来に向かって如何に進んで行くかを考えることである。

質問 13：戦争が終わって 50 年以上が過ぎました。この期間の社会の変化を、おじいちゃんは、どのように考えますか？

日本の高度成長は、日本人の勤勉さによる面もあるが、東西対立の冷戦構造という世界情勢が日本を助けた何よりのものだと言える。この好例が、朝鮮戦争である。この戦いが、後方物資補給基地としての役割を果たす事になった。そして、日本は復活したのである。もう一つの側面がある。この朝鮮戦争で、マッカーサーは、この時初めて日本の地政学的位置にとって、北からの攻撃がどんなに脅威であるかがわかったのである。マッカーサーは、アメリカの上院での証言で「日本が中国大陸に進出したのは侵略戦争ではなかった。自衛のためであった。」と証言している。

第一次大戦の後、領土の切り取りは平和をもたらさず、却って戦争後の火種になる事を世界は学んだ。だから、第二次大戦では勝者による領土の切り取りは行わず、收拾が図られようとした。日本が領有する以前の状態に復元された。但し、唯一の例外があった。それは旧ソ連である。東欧諸国を囲い込み、ドイツと朝鮮半島を分断国家にしたのである。今やそれも解消されつつあるが、切り取られた領土がただ一つある。それは北方領土である。これは、ヤルタ会談でスターリンを対日参戦に引き込もうとしたアメリカ、イギリスの責任でもある。

質問 14：戦後の日本は、アメリカの影響をあらゆる面で受けた。日本の現在は、アメリカ抜きでは考えられないと思うが、おじいちゃんはどう思いますか？

自分を自分足らしめているものの基盤は、国民性であり民族性である。これが明確でなければ、お互いの違いを認め合い、受け入れて行く事が出来ない。根無し草になってしまう。国際化とは国民性とか民族性の明確化と同意語であることを知るべきである。又、真の国際人とは、日本のアイデンティティを身に染み込ませ、自国の公の為に身を捧げるという心捧をしっかり備えている (6)

と言う事が第一条件である。

質問 15 : Miss. Wood は、天皇に非常に関心を持っています。天皇についておじいちゃんはどのように考えていますか？

アメリカ人には日本の天皇はわからないであろう。自然を始めとする身の回りのものを全て有り難いと感じ、畏れ敬う感性、そういう日本人の心の根本にあるものが判らなければ天皇の存在は理解する事が出来ないと思っている。天皇には「姓」がない。あるのは名前だけである。日本の皇室は、一度も交代して居ない。だから他と識別する必要がなないのである。天皇は祭祀王の色彩を色濃く残している。それを、戦争中、軍部は利用し過ぎた面がある。神事を国家神道にまとめ上げ、それを神がかりな戦意高揚に利用したのである。アメリカはこの様な天皇の存在を不気味に感じ、神がかり的要素をはぎ取ろうとした。GHQ は天皇を日本の宗教面での頂点に位置しているものと捉えたのである。私に言わせれば、神道を宗教と捉えるのがそもそも間違いである。宗教にはまず「教組」が居る。そして宗教には体系化された「教義」がある。又宗教には必ず「教団」という組織がある。これ等によって信者と非信者を色分けするのである。神道にはこの三つの宗教の要件が備わっていない。従って神道は宗教ではないのである。では何なのか？それは日本人の心である。自然を畏れ敬う。そこから出てくる感謝の念、謙虚な心持、和を尊ぶ在り方。それを土台にした規範、礼節、道徳、それらのトータルとしての日本人の心が神道と言われるものの内容なのだ。天皇は日本人の心の体现者であり、日本人の心と一体となった存在なのだ。だからこそ、天皇は日本人の求心力として今日まで絶えることなく存在し続けて来たのだ。歴代の天皇が権力者であったことは全くない。しかし、政治制がないというとそうでもない。日本が存亡の危機に直面した時、それは発揮されて来た。明治維新、終戦にそれは示されたのである。このような精神性を備えた存在は世界に例を見ない。だから外国人には理解が難しい。

質問 16 : 日本という国のこれからの有り方について、日本とアメリカの関係について、あるべき姿についてどのように考えていますか？

私がこれからやるべきこと、それは「日の丸」を心の底から誇りを持って掲げることが出来る日本人。「君が代」を喜びを持って歌える日本人を一人でも多く増やしていく事である。国を愛する気持ちを胸の奥底に持っているような日本人を一人でも増やしていく事である。もう、私は人生の上がりに来た。日本の現状や将来に対して目を背けて行っても良い。だが、それでいいのだろうか？うるさい爺さんと思われても、言うべきことは言い続けなければならない。景子の質問に答えながらそう思うようになった。(7)

「日の丸」は、近世初頭に、朱印船の旗印として使われるようになり、鎖国後は、幕府専用の旗印として、公的権威を持つようになった。遺米使節を乗せた咸臨丸にも日の丸が翻っていたのである。「君が代」の原歌は「古今集」に出てくる、読み人知らずの祝い歌である。平安時代から長寿奉祝の祝い歌として受け止められてきた。これがこの歌の本意である。又、国家、国旗を持つ事は、国家意識の強化につながる又、個人の自由を圧迫すると言って反対する人がいる。バカなことを言うなど言いたい。国なき民の悲惨さを知らないから、そんなことが言えるのだ。独立した国家を背景を持つことが、人間の自立と自由を保障する何よりのものである事を知らないから、そんなたわごとを言うのだ。これから、もっと日本に外国資本や、外国人、外国文化が入ってくる。国際化の進展に拍車がかかるだろう。その中で「根無し草」だったら、どういう事になるだろう。国際化の波に飲み込まれ、存在が消されて仕舞うかも知れない。国際化とは、国民性、民族性の明確化と同義語である事を知るべきである。これは、国家レベルでも同じである。アメリカも日本もお互いの違いを明確に認め合い、過去に敵として戦ったお互いの過ちを共有する日本とアメリカにならなければならない。そうする事によって日米両国は、真のパートナーシップを確立する事が出来る。景子は、アメリカで学ぶこの機会に、単に英語の上達とアメリカを知る事だけに終わらせてはいけない。アメリカを知る事によって、日本を知らなければならない。それが景子の課題だと自覚して欲しいとおじいちゃんは切に願っている。

「おじいちゃんのレポートを読んで」 馬場景子

おじいちゃんに送った「質問状」に対する分厚い、重い「答え」が届きました。このレポートを英語に翻訳するのが大変でした。父に助けて貰いました。父は「大変勉強になったよ」と言っていました。私は、おじいちゃんの長いレポートを読んで、おじいちゃんがもっと好きになりました。どんなに真剣に、これまでの人生を歩んできたかが分ったからです。胸が震えました。アメリカで教わる「アメリカ史」は電話帳のような厚さがあります。日米の戦争の事も相当な分量を占めています。そこには、アメリカが日本と戦ったのは、正当な理由があったからだと書かれています。つまり、不当なことをしたのは日本だと言う事です。この時の授業では、顔を上げられないような気分でした。しかし、中には、ちょっと違うぞという感じがしても、それを発言出来ませんでした。それは、私が何も知らなかったからです。知らないと言う事は恥ずかしいことだどつくづくその時感じました。レポートを提出した時、Miss.Woodは、驚きの声を上げました。そして「景子のおじいちゃんに、私がどんなに感激しているかを伝えてちょうだい」と言ってくれました。 (8)

彼女は、このレポートを大量にコピーして、全校の彼女の歴史の授業を受けている生徒に配布しました。その反響は大変なものでした。「一つの事を反対側から見ると違ったことが分かった」「共感した。日本に行ってみよう」「すごく勉強になった」と言われました。私はそれを聞いて涙が出るほど嬉しかった。

Miss.Wood のアメリカ史の授業は 40 分ですが、先生が喋るのは長くて、精々最初の 10 分程度で、後は、生徒の報告とそれに対する質疑応答に当てられます。日本のように知識を覚え込むのではなく、まず考える事が最初に来ます。考える為には知識が必要になります。そして知識を覚え、それに基づいて、さらに考えそれを発表する。其処に一番力が注がれているのです。私がショックだったのは、その討論に私自身が中々加われなかった事です。英語がネイティブのように操れなかった事も有りますが、それだけではありません。いざ発言しようと思っても、私の頭は空っぽで、主張すべき自分の意見がないのです。それに気づいた時は愕然としました。おじいちゃんが言うように、私の中にアイデンティティの核となる、民族としての心がないから、何をどう考えていいか分からないし、従って、これといった意見が無いと言う事になってしまうのです。今の私は、判らなくとも、中身が貧弱であっても、纏まっていなくとも、とにかく、自分が感じたことを言葉にして発現するよう心がけています。

コメントと感想

三十年前、初めてアメリカを訪れた時、何でこんなに大きな、文明の進んだ国と日本は戦争をしてしまったのか？という疑問をずっと考えて来た。先輩に聞いたり関係する本を読んだりして、それなりに自分自身の考えを作って来たつもりである。しかしそれは、「ハル・ノート」が提示される以前の日本の状況についてであり、ハル・ノートを突き付けられ、イエスかノウか問われたら、どんな小国であっても戦争をするしか道はないと思っていた。つまり、この様な状況に追い込まれる前に何か解決の道がなかったか？を考えていた。

この戦争の背景には日本軍隊の突出がまず考えられる。これは当時の日本に限った事ではない。世界を見ると、政治が未熟で、民主主義が生育して居ない国によく見られる事である。今でも軍事政権は存在する。当時の日本は、選挙権も被選挙権も、ある一定の税金を払っている人にものみ与えられていた。しかもその大多数は地主であり実業界で成功した人々であった。貧しい農家の次男以下の男子の内、健康で勉強が出来る人が、学費不要の軍関係の学校に行き、そして将校になった。つまり、彼等が地方の貧しい人々の代表であったのである。軍のイニシャチブの最大の原因は「統帥権」である。軍は政府の傘下にあるのではなく、天皇に直接つながる組織である事を利用し、軍にとって都合の悪い政府には陸・海軍大臣を送らなかつた。そうすると組閣が出来ない。 (9)

この帝国憲法は、明治、大正時代もカバーしていたが、その当時は維新を命がけで創り上げた明治の元勳達が、その運用を握っていた。昭和の時代になり彼等は高齢で力が衰えたり、亡くなったりした。其処に、不況、世界的恐慌が襲う。そして、5・11、2・25 事件という軍によるテロ行為の勃発である。軍備拡張に反対する政治家はそのターゲットになった。政党も政権奪取にのみ走り墮落して行った。政府の不拡大方針に対し、陸軍は独走し、満州事変、シナ事変が起こった。満州までならまだ列強を本気で怒らせなかったと思うが、シナの侵攻は、アメリカを始めとする西欧列強の「虎の尾」を踏んでしまったのである。それが「ハル・ノート」であると小生は思っている。

そもそも日本列島は海に囲まれ、海岸線が長く、国を防御するのが難しい。そこで、海を隔てた朝鮮半島、千島列島、中国北部を防波堤にして、日本を守るしか方法が無かったとも言える。勿論、だからとは言って、よその国を占領していいというわけではない。それが、著者が言っているソ連を中心にした「北からの脅威」である。

それと、遅れて中国に利権を求めて来たアメリカが、当時の蒋介石国民政府と結びつき日本を敵視した。そして中国国内でクーデターを起こした共産党赤軍は、日本と国民政府軍が戦う事によって、国民政府軍の戦力が劣化する事を願ったのである。実際、日本軍と赤軍は1度～2度しか戦闘して居ない。中国共産党がその成立の根拠にしているのが、日本の侵略に対して対抗する為と言っているが、それは事実と異なる。内乱によるクーデターとしての成立は不都合である事から、現在の中国政府は「歴史認識を正せ」と主張しているのである。これは、共産党成立の核心的根拠である事から、この旗を降ろすことは絶対に無いであろう。だから、現在の「日中問題」は厄介なのである。

著者は、日本を仮想敵国とした「オレンジ計画」の存在から、「ハル・ノート」は日本を戦争に誘い込む為の方便だったと言っている。もしそれが本当であれば、日米戦争は得心が行く。しかも、日本はアメリカ大陸に上陸し、ワシントン占拠し、アメリカ憲法を変えることまで考えていたとは到底思えない。これは、中国大陸に於いても同様である。どうもこの戦いは、大規模な戦争というより、ハワイを含んだ地域戦と日本は考えていたのではないか。そう考えなければ、出口戦略無しで突っ込んで行った日本の行動を理解することが困難である。しかし、独、伊との三国同盟を結んでいた日本を世界はそう見ていなかったのも明らかである。本書の「解説」で渡部昇一氏が、この戦争は日米双方に過ちがあったが、7：3で米国の方が過ちは大きいと言っている。各位はどう思われるであろうか。

本書で最も注目したいのは、孫の景子が、アメリカの高校で、あるテーマで討議した時、言葉の問題とは別に、この討議に参加できていない自分にショックを受けたと言っている事である。自分の意見を言う時、自分の国の文化、伝統を含む国民性と民族性を持っていないと、自分が主張すべき考えを持っていない事に気が付いたというくだりである。紹介しなかったが、日本で中国の留学生が、日本語のスピーチ大会で「沈黙する羊たち」と題して、日本の学生は、口をつぐんで全く意見を言わないので、何を考えているのか分からないし、不気味だと訴えていることが書かれている。これでは日本人は、本当に何も考えていないか、考えが無いのかと思われても仕方がない。「それ、イラッとする」というワンフレーズを言うだけでは、相互理解は進まない。真に残念である。

本書を読んで著者に 100%同調できなくても、少なくとも自分の頭で考え、反省と抗議の声を発した事は素晴らしい。しかも普通の市井の人が書いたのである。今後、日本の中学・高校の近・現代史の授業の副読本として、是非本書が使われて欲しいと思うのは小生だけではないだろう。良書である。是非、各位にご一読をお勧めする。